
僕の最悪で最愛のスクールライフ

youno

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の最悪で最愛のスクールライフ

【Nコード】

N2076Q

【作者名】

youno

【あらすじ】

見た目で疎まれ、恐れられな少年のちょっとしたお話

「僕は学校が嫌いだ」

彼——岸^{きし} 大翔^{ひろし}は、学校が嫌いである。

どんなに真面目な人間として暮らしていても、毎日の様に生徒指導室への呼び出しがかかり、何もしていないのに服装や頭髪、更には持ち物検査までされる。

もちろん、彼は一度としていわゆる非行と言うものを行なったことなど無い。

では何故か。それは外見に問題があった。目は細く、まるで睨みをきかせているかの様な容貌。そして、生まれつき少し髪の色が明るかった。明るい、と言っても、染めた茶髪とは比べ物にならない筈なのだが、毎度生徒指導の教師は厭味ったらしく染めたんだろう？と問いただすのだ。

中学校の時の生徒指導の教師はなかなか理解のある人物で、「わざわざ黒染めする必要なんてない。髪の長さが校則に則っていれば、恐らく文句も言われないだろうし、私が言わせない」と彼の事を正当に見てくれたのだ。

だが、この‘県立^{たてがみ}建神高等学校^{やりました}’の生徒指導の教師は目をつけたら、たとえ冤罪でもYesと答えるまでしつこく付きまとってくるのだ。

しかし、これだけが学校を嫌になる理由ではないのだ。その見た目、百八十六cmという身長。それのお陰で学校中から恐れられる存在となってしまった。最初こそ、どうにかクラスメイトとは仲良くなるう、と決意し近寄って行ったが逃げられてしまった。そして、そ

んな彼は見た目とは裏腹に弱気で、こんな事をされればそんな決意など崩れ去ってしまう。

教師には学校の汚点だと疎まれ、他の学生からは恐れられる。こんな状況で、学校を嫌いにならない者はいないだろう。

では、何故学校を辞めないの？　と言う疑問が出てくるだろう。そこそが今の彼を支えている‘モノ’であるだろう。

僕の最悪で最愛のスクールライフ

午前六時、それが大翔の慣れた生活リズムの開始の時間。既に父親は出勤しており、母親がそろそろ起きてくるだろう大翔の朝食を用意している筈の時間。

大翔は、眠りから覚めたばかりのその体をのそのそとけだるそうにベッドの外へと出す。体がベッドに寄りかかっている状態で、ぼうつと正面の壁を見据えた。

「おはよう」

別に、そこに何か——常人では視認出来ない何者か——がいるわけでもなく、ただただ、壁に向かって朝の挨拶をする。それが半日、誰とも会話しない彼の日課であった。

日課を済ませた後、カーテンを開きそのまま自室を出て一階へと降りる。そのままダイニングへと入っていく。

「おはよう、母さん」

「おはよう、ヒロ。さ、もう出来上がってるから」

既にテーブルの上には朝食が並んでいた。母親は、笑顔で大翔をダイニングへと迎え入れ、食卓につくように促した。

「いただきます」

そう言つて食事を始めた息子を、母親は複雑な目で見つめていた。

午前七時、食事を終え自室に戻つてきていた大翔は、学校へ行く準備をし終えていた。そして、昨日何時の間にか血の出ていた指につけていた絆創膏を外し、新しい物に換え、机に丁寧におりたたんでいたハンカチをこれまた丁寧にカバンへと入れる。

すると、これで登校の準備は終えたようで、カバンを片手に部屋を出る。階段を降りて玄関へとやってきた。

ローファアを履き、いざ出発と言うときに母親がやってきた。

「いつてらっしゃい。ヒ口。勉強、頑張つてね」

「いつてきます」

美しい笑顔でそう言つた母親に、少し、硬い笑顔で返し、玄関口の戸を開け出て行く。

大翔は、自発的に笑顔をすることが得意では無く、こんな風に硬い表情になつたりしてしまう。しかも、口も達者では無いし逆に口下手と言つても過言では無いくらい人と喋るのが苦手である。

流石に、肉親にまで口下手になつたりはしないが、だからといって進んで会話するわけでも無く、表情は少しこわばつてしまう。

大翔の高校は電車を使い、更に最寄り駅から徒歩で十五分の場所にある。その為、少し早めに家を出ていても、学校に着く頃には時間ギリギリだったりする。そして、この時間ではギリギリ、というか遅刻する可能性のかなり高いだろう。

だが、最近の大翔は敢えてその時間に出て行く。それこそ、初めてのちよつと悪つばい行動。

何故、この時間に出るのか。それは――

「次は大海、おおみ大海です。降り口は変わりましたて右側となります」

この駅で建神の生徒は降車する。もちろん、大翔も降りる。

ホームから改札口へ移動する際に大翔の目には建神の生徒は映らなかった。それもその筈、この時間にはすでにほぼ全ての生徒が登校

済みだろう。いたとしても腹痛等で苦しめられて狭い個室で強敵と戦うハメになった戦士たちと、一部のヤンキーな生徒だけであろう。改札口を出てから少し小走りになり、段々とペースを上げていく。学校に着く頃にはほぼ全力疾走となっていた。

学校が段々と近づいてくる。そう考えるだけで、既にダッシュに近い走りをしていてバクバクの心臓が更に鼓動を激しくする。そして、校門が迫ってきた。すると、

「岸くん！ 早くしないと遅刻になっちゃうぞぉー！」

少し大人びた優しい声色の声が前方から聞こえ、ふとそちらを窺ってみる。そこには、一年先輩で、現生徒会長の佐藤 桜がいた。が、大翔は彼女がそこに居ることは知っていた。

何故、この時間に出るのか。それは、その為にわざと遅刻しかけているのだから……

「岸くん！ 今日こそは早く来るって約束したでしょう！……全く、何時もより少し早くここに立ってたんだからね」

呆れ気味に言い、ジツと大翔を睨む。しかし、桜が睨んでいるつもりでも、どこからどう見てもただ見つめているだけにしか見えない。やはり、大翔もそう思ったのだろう。少し頬を朱に染めた。しかし、彼はなにかを振り払い、佇まいを正し、口を開く。

「……先輩、その……今日もギリギリで、すいません……あと、コレ、昨日……借りたハンカチ、です……その、ありがとうございしました」

ハンカチをカバンから出しながら、彼なりに誠意を込めて謝罪とお礼を。すると、桜は、

「うん、どういたしまして……うーん。しっかり謝ってくれたし、岸くんの学校での事も知ってるし、今日は許してあげる。ただ、生徒会の先生は貴方の事、わかってくれてるし、きっとその内教師の方の誤解は解けると思うから。だから、さ。クラスメイトの人たち

からでも自分で誤解を解かないと……まずは、しつかり登校しなきゃダメだぞ！」

大翔の学校を嫌う核心の一つに触れた時こそ真剣な表情になったが、終始笑顔で最後には軽く冗談の様に言った。

「はい……その、気遣ってくれて、ありがとうございます」

嬉しくなり、つついっ頬が緩みそうになるのを堪えながらお礼を述べる。そして、桜のその眩しい程綺麗な笑顔に心拍数が上がる。

「さ、流石にもう教室に行かないと大変だよ？ 私もそろそろ教室行くし、途中まで一緒に行こうよ」

そう、正直な所、これ以上喋っていると遅刻が完全に確定してしまうのだ。

大翔は、そんな桜の誘いに乗って一緒に移動する。そして、一旦昇降口で分かれた後、再び階段前で落ち合い階段を上っていく。

三階に着き、二年である桜はここで廊下へ、一年である大翔は一つ上の階の為、ここで分かれる事になる

。そこで、桜が振り返って、

「岸くん。明日こそ、絶対にいつもより早く来ること。約束だからね」

綺麗な笑顔を湛えて約束を結ぼう、と迫ってくる。大翔は少し照れながら、

「わかりました」

と少し大きめの声で言った。満足いった桜は今度こそ廊下に出ようとした時、

「先輩」

と、先ほどよりも小さな声で大翔が止めた。

「なに？」

と、桜が振り返ると、そこには――

「先輩。やっぱり、学校は嫌いです」

——頬を染め、満面の笑顔でそう言った大翔がいた。

（後書き）

長編として投稿する筈だった……

のですが、敢えて短編にしてこの様な終わり方にする方が面白いかな、なんて思ってしまった。

短編としてはかなり短いですね……

申し訳ない；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2076q/>

僕の最悪で最愛のスクールライフ

2011年1月18日22時08分発行